

ソローと森の生活

豊田 千代子

はじめに

ヘンリー・D・ソロー (Henry David Thoreau, 1817 - 1862) の『ウォールデン 森の生活』(“Walden; or, Life in the Woods.”、以下、『ウォールデン』と記す) は、1854 年に出版されたアメリカの古典文学である。世界的によく知られ、日本での翻訳書も多数存在する。

本稿では、こうしたソローの著書を取り上げ、検討してみたい。

『ウォールデン』は、ソローが体験した 2 年余りの森の暮らしを、1 年にまとめて書いたものである⁽¹⁾。ソローは、マサチューセッツ州コンコードのウォールデン池の畔に家を建て、自給自足的生活を送った。森の中で一人で暮らしたのである。

その森で、ソローは、自然と出会った。自然との出会いを通して、自分とも出会った。その歓び(とりわけ自然について)が、本書には生き生きと描かれている。同時に、自然や自分との出会いを通して生まれた、豊かさとは何か、そしてどう生きるのかといったソローの人生観も随所に記されている。

ソローの森での生活は、すべての生命が繋がり互いを生かしながら生きている生命世界の豊かさを、ソローに気づかせてくれた。また、簡素に暮らし

「今」を生きることの意義を認識させてくれるものだった。

以下では、こうしたソローの森の生活を綴った『ウォールデン』について、それに見られるソローの思想を読み解いていきたい。

具体的には、まず、森の生活を始める前に焦点を当て、ソローの生涯と、ソローが森の生活を始めた理由について述べる。次に、森におけるソローの具体的生活について検討する。最後に、森の生活を通してソローが到達した生き方について考察する。

なお、本論では、今泉吉晴訳『ウォールデン 森の生活』（小学館、2004年）をもとに、ソローとの対話を試みる。

1. ソローと森

ソローがウォールデンの森での生活を始めたのは、27歳の時だった。ソローは、1845年7月4日に森に移り住み、1847年9月6日に去ったのだが⁽²⁾、ここでは、森で暮らし始める前のソローに関して記していく。

(1) ソローの生涯（森の生活以前）

ソローは、1817年7月12日にコンコードで誕生した。翌1818年から、コンコードを5年間離れ、その間、チェルムズフォードとボストンで過ごした。その後、1823年にコンコードに戻り、以降、ソローはこの地で生涯を過ごすことになった。1833年に、ハーヴァード大学に入学し、1837年に卒業。同年、ソローは、コンコードの学校に2週間勤めた。また、翌1838年から約2年間、ソローは兄と一緒に、「少年少女たちのための私立学校の経営に従事」した。ソローには、教師として過ごした時期があったのだ。加えて、ソローは、この時期に、コンコードでの講演を開始した。1838年の講演（テーマは「社会」）を皮切りに、ソローは、森での生活時も含めて生涯にわたり、ほとんど毎年、講演を行った。さらに、ソローは、この時期に、エマソンと親交を結んでいる。そして、エマソンを中心とする超絶主義者の季刊誌『ダ

イヤル』(1840 年創刊、～1844 年)に、エッセーや詩を寄稿した。

ソローは、森の生活に入る前に、教師、講演、文学の仕事に携わっていたのだった。また、ソローは、父の鉛筆製造の仕事を手伝ったこともあったのである⁽³⁾。

(2) 「生きるための実験」

こうした生涯を過ごしてきたソローは、なぜウォールデンの森で暮らすことを決意したのだろうか。

それは、ソローが深く生きることを強く望んだからに他ならない。ソローは、森で暮らす理由を、次のように明確に述べている。

私が森に行って暮らそうと心に決めたのは、暮らしを作るもとの事実と真正面から向き合いたいと心から望んだからでした。生きるのに大切な事実だけに目を向け、死ぬ時に、実は本当には生きてはいなかったと知ることのないように、暮らしが私にもたらすものからしっかり学び取りたかったのです。私は、暮らしとはいえない暮らしを生きたいとは思いません。私は、今を生きたいのです。私はあきらめたくはありません。私は深く生き、暮らしの真髄を吸いつくしたいと熱望しました⁽⁴⁾。

ソローは、人生にとって大事な、あるいは人生そのものと言える、「生きる」こととしっかり向き合うために、森での「暮らし」を体験することにしたのだった。「深く生き、暮らしの真髄を吸いつく」す生き方こそ、ソローが求めたものであり、ソローにとって森での暮らしは、「生きるための実験」⁽⁵⁾だったのである。

2. 森におけるソローの生活

ここでは、森におけるソローの生活を、自然とともにある簡素な暮らしと捉えて、その実態について述べていく。

(1) 簡素な暮らし

ソローの試みた森での生活——「森の暮らしの実験」⁽⁶⁾の特徴は、ソローが簡素な暮らしを貫いた点にある。そして、その暮らしを存分に楽しんだことも大きな特徴のひとつと言える。

ソローは、自給自足に近い暮らしを送った。また、余暇という自由な時間をととても大事にした。散歩、読書、自然観察、友人・訪問者との交流などにより、ソローの森での暮らしは、決して孤独ではなかった。ソローが簡素な生活によって作り出した時間的余裕は、ソローに精神的余裕とそれに伴う自由の感覚をもたらしたことだろう。そして、その心地良さこそが、ソローにとっては生の実感（生きること）と深く結びついたものだったに違いない。森でのソローの暮らしは、おそらくは、孤独感をはるかに上回る生の充足感で満ちたものだったのではなかろうか。

こうした簡素な暮らしについて、その実態を述べる前に、ソローが“暮らしに必須な物”⁽⁷⁾と捉えているものを押さえておこう。ソローの簡素な暮らしや生き方を理解する一助となるからだ。

ソローは、当時のアメリカで暮らすのに必須の物として、食物、避難場所（住居）、衣服、燃料の四つを挙げている⁽⁸⁾。また、ソローは、自分で実験した結果、これら以外には「以下の若干の物を除いたほとんどすべての物が^{すき}必要ないことを発見」している——ナイフ、斧、犁、手押し輪車、その他いくつかの道具類、勉強したいならランプ、紙といくらかの文房具、図書館などの本が読める環境⁽⁹⁾。

ソローは、四つの必須物以外には、人はささやかな道具・環境で暮らせることを、森の暮らしから知ったのだった。

その森でのソローの実際の暮らしぶりを、まずは、住居の点から見てみよう。

ソローの家は、「かなり大きな森の端に位置するリギダマツとヒッコリーの若木の明るい林の斜面」⁽¹⁰⁾に建てられており、家の前には、すぐ近くにソロ

ーがこよなく愛したウォールデン池があった。「明るい、しっかりした造りの清潔な家」⁽¹¹⁾で、一番近い隣人の家とは一マイル離れていた⁽¹²⁾。

その家は、ソローが手仕事で建てた、一部屋の小さな家だった。部屋は、台所、寝室、客間、居間を兼ねており⁽¹³⁾、そこに家具が備えられていた⁽¹⁴⁾。

家づくりの作業は、ほとんどすべてソローが行ったものなのだが⁽¹⁵⁾、「暖炉こそ、家の最も大切な部分」と考えたソローは、暖炉づくりに手間ひまをかけていた⁽¹⁶⁾。そうして、「冬の夜を炉辺で心ゆくまで楽し」んだのだった⁽¹⁷⁾。

住居について、ソローは、「私たちは、家を造る楽しみを、大工に譲り渡したままでいいのでしょうか？」と、問いかけている⁽¹⁸⁾。住居は「住み手が自分で造り、真面目に考えて、初めて意味がある」のであり、「住み手抜きでは、魂が抜けているのも同じ」とソローは考えたのであった⁽¹⁹⁾。

この家づくりと同様に、ソローにとっては、暮らしを支える畑作りもまた自分の魂を吹き込む楽しい仕事であった。

ソローは、自分で畑を耕して、インゲン、ジャガイモ、トウモロコシ、エンドウ、カブを収穫した⁽²⁰⁾。もちろん、それらはソローの食卓にのぼったのだが、それ以外に、ソローは、インゲン豆などを売って収入を得ることもした⁽²¹⁾。ソローは、「私の農場は、魂を大切に今を生きる、私の生きるための方法の実験場」⁽²²⁾と述べている。

ソローは、自分で耕した畑やそこに育つ作物を、愛していた。だが、畑仕事に一日中従事したわけでは決してなかった。畑仕事は暮らしに必要なものの、農作業にすべての時間を費やすことは、ソローの望む生き方ではなかったのだ。ソローは、午前中に、豆畑に鋤を入れる畑仕事を行ったりした後、午後は、「完璧に自由な時間」を持ち、その時間を、毎日か一日おきの村への散歩に充てている⁽²³⁾。その際、友人宅を訪ねることもあった⁽²⁴⁾。

ソローが 2 年間の畑作りの経験から学んだのは、「簡素に、純真に暮らせば、自分で育てた作物を食べて生きられる」ことであった⁽²⁵⁾。また、自由な時間を暮らしに確保したソローが実感したのは、「生きる」ためには自由な

時間が不可欠であるということだったと考えられる。

なお、ソローは、森で以上のような自給自足的な簡素な暮らしを送ったわけだが、それは、お金を全く必要としない完全な自給自足生活ではなかった。わずかながらもお金が必要なこともあったのだ。ソローは、土地の測量、大工仕事などをこなすことができ、森で暮らした期間に、実際に、何回か日雇いの肉体労働の仕事に携わり、収入を得たのであった⁽²⁶⁾。

(2) 自然とともにある暮らし

ソローの森の暮らしの特徴は、上述のような簡素な暮らしに求められるが、そうした暮らしが、自然と深く結びついたものであったことは見落とせない。ソローの暮らしは、常に自然とともにあった。森に育つ樹木、森に暮らす動物、森に生きる植物、森でさえずる野鳥、ウォールデン池で暮らす魚、ウォールデン池の水や氷、さらには、森を照らす太陽、森をかけぬける風など。そして、これらが季節の折々に見せるさまざまな姿——それらすべてが、ソローの暮らしを豊かにしている。それらすべてはソローの暮らしそのもの、と言ってもよいかもしれない。

ソローは、森で暮らす中で、自然をよく観察した。そして、それを存分に楽しんだ。自然の観察は、ソローに歓びを与えるものであり、また、驚きをもたらすことも多々あったのだ。ソローは、森の生活で、自然と出会ったのである。

また、森での一人暮らしは、ソローが自分だけの時間（世界）をもつことを可能にした。そのことが、自然をソローがよく観察したり、よく感じることに、すなわち自然と出会うことへと繋がっているように思われる。

ある時、ソローは、自然を次のように感じた記憶に残る体験をした。

今宵は、まことに味わい深い夕べでした。私は体のすみずみまで、ひとつの感覚で満たされました。体のあらゆる細部が、くまなく、自然を歓びをもって受け入れている、とわかりました。私は気の向くままに歩き、自

分を自然の小さな部分と感じて、不思議な自由を味わいました。(中略) 私は今宵の自然のすべての要素(雲り空、寒さ、風など)が私に親しくしてくれると、自分でおかしくはないかと思うほど強く感じました⁽²⁷⁾。

この文章には、ソローが自然を深く感じた体験が記されている。もしかしたら、ソローが生涯でほとんど初めて感じた自然との一体感を綴ったもの、と言えるかもしれない。

「体のすみずみまで、ひとつの感覚で満たされ」た実感。「体のあらゆる細部がくまなく自然を歓びをもって受け入れている」実感。また、「自分を自然の小さな部分」と感じたという実感。さらには、「今宵の自然のすべての要素(雲り空、寒さ、風など)が私に親しくしてくれる」と感じたという実感。これらの感覚は、ソローの身体が自然に対して開かれていたからこそ生まれたものである。そして、このように自然を感じる事ができたのは、ソローが自分だけの自由な時間をもっていたことと関係があるのではなからうか。

ソローが今宵に感じた感覚は、とても深いものである。中国で言われる「気」や、インドのヨーガで言うプラーナといったような、宇宙に遍在している生命エネルギーをソローは感じ取ったのかもしれない。

いずれにせよ、ソローが自然を深く感じる事ができたのは、自然とともにある暮らしの中で、ソローの身体が自然に対して開かれていたからに相違ない。

ソローは、この例のように、自然をよく感じて暮らした。一日一日、あるいは一日の中の一コマコマが自然との出会いであり、その出会いは常に新鮮なものだった。それ故、ソローにとって、森の暮らしは生き生きとした楽しいものとなったのである。

このような自然との出会いは、ソローと自然との結びつきを次第に深めていった。そして、自然との繋がりの実感が自然に対するソローの感受性を鋭敏にし、ソローの内的世界を豊かなものにしていったのだった。

自然との関係の深まりの中で生まれたソローの感受性の鋭敏さは、自然を

「友人」、「仲間」と捉える次の文章からもうかがえよう。

森のマツの針のような葉も、私への共感をもってゆっくりと開き、伸びて、私の友人になりました。私は自然の社会に、気の合う、いわば血縁関係の近い仲間がいるのがわかるようになり、人々が粗野で不毛だという自然の景観や場面も、親しみをもって見るようになりました。私にとって、血縁が近く人間的に感じられる仲間は、必ずしも人ではなく、村人でさえありません。今の私は、自然のあるところならどこでも、初めての場所だとは感じないでしょう⁽²⁸⁾。

この文章は、ソローが、マツの葉が開き、伸びていく様子を観察したことを語っている。ソローは、マツの葉というマツの木の細部にまで注目し、自然観察を行ったのだ。マツの葉がゆっくりと開き、伸びていくというソローの観察眼は鋭い。おそらく、ソローは、たっぷりの時間をかけてじっくりとマツを観察したのだろう。

ところで、ソローのマツへのこうした関わり方は、ソローとマツ（自然）との境界を次第にかす方向へと変化させていった。その結果、マツの葉が「私への共感をもってゆっくりと開き、伸びて、私の友人」になったのである。確かに、ソローの感覚が研ぎ澄まされ、マツの葉に対してソロー自身が共感をもてるようになったわけだが、ソローには、実際このように感じられたのだった。そして、このような深く具体的な体験が、自然一般へのソローの親しみの感情を生み出していったと言えるだろう。

自然と深く関わるのが、ソローの感受性を高めたと考えられる一例である。

3. ソローの生命の哲学

ソローは、上述のような自然とともにある簡素な暮らしを通して、生きることの本質についての洞察を深めた。それをソローの生命の哲学と捉えて、以下で述べてみたい。

(1) ソローの人生観・自然観

①人生観

森の生活の中で、人はどう生きるのかという、生の根幹となる問いとソローは向き合った。そうして、ソローの生命哲学の柱のひとつである人生・生き方についての次のような見解が生まれたのである。

ソローは、自由に生きることが「生きる」ということだと考えた。それは、自分を大切にすることでもあった。ソローはまた、このように「生きる」ためには、自由な時間がとても大事であり、それを生み出すために簡素に暮らす必要があると考えたのだった。物理的な自由な時間は、内面の自由さに関係があるとソローは捉えているのだ。

自給自足的で簡素なソローの暮らしは、実際に、ソローに自由で開放的な時間をもたらしたのだった。上述のように、豆畑の仕事などを午前中に終えたソローは、午後の自由な時間を、散歩や自然観察などに充てて、暮らしを存分に楽しんだのである。ソローにとっては、こうした仕事の仕方と余暇の過ごし方をともに満喫することが「生きる」ということなのだろう。

簡素に生きることで、自由に生きる。これこそが、ソローの人生観と言えるのだ。

簡素な暮らしは、ソローにとって、自分の人生を豊かにする生き方なのである。「簡素に、簡素に、さらに簡素に生きましょう！」⁽²⁹⁾ ——ソローは、私たちにこう呼びかけている。

②自然観

簡素に生きることで、自然をよく感じて生きる。これもまた、森の生活によってソローの中に生まれた生き方の哲学と言えるだろう。

森の中で、ソローは、簡素に生き、自然をよく感じて生きた。それは、ソローに自然との多くの出会いをもたらした。そして、それらの中から、自然

界に存在するものは、すべてが繋がりあい互いを生かしながら生活しており、そこでのすべての生命は対等である、という生命に着目したソローの自然観が生まれたと考えられる。

ソローの暮らしは、自然とともにある暮らしだった。それは、ソローの前に姿を見せる動物、ソローが発見する植物、ソローが眺める樹木、ソローの眼前に広がるウォールデン池といったように、具体的な自然とともにあった。そして、その自然は、ソローを癒したり、ソローの生活に潤いや楽しみをもたらしてくれるものだった。こうして、ソローは、人の暮らしが自然に支えられていることや、自然と結びついていることを実感した。また、ソローは、自然観察を通して、森という生命世界の中での動物と植物との繋がりや、動物同士、植物同士の繋がりなどにも気づいていったに違いない。こうした具体的な自然との深い関わりの中で、上記のような自然観は生まれたのだった。

ソローの自然観の形成にはまた、上述の「今宵」のような体験や、マツの葉を友人と感じるようになった体験など、とりわけソローが自らの身体感覚と向き合うことになった体験も影響を与えていると考えられる。

「今宵」における、「体のあらゆる細部がくまなく自然を喜びをもって受け入れている」実感や、「自分を自然の小さな部分」と感じたという実感は、自然と人間とが繋がっているという見方をソローにもたらしたのではなかろうか。さらには、人間は自然の一部である、という見方も同時に生み出したと考えられよう。

また、マツの葉がソローへの共感をもって開き、伸びて、ソローの友人になった、というソローの認識からは、ソローがマツを自分と同じ生命体と捉えていることがわかる。しかも、マツの生命と自分の生命とを対等なものとして見なしているように思われる。

(2) 深く生きる

簡素に生きることで、自由に生きる。簡素に生きることで、自然をよく感じて生きる。これらは、森でのソローの生き方であった。

この自由に生きることや、自然をよく感じて生きること、また自然以外のものごとにもよく感じながら生きるといったことは、深く生きることを意味する。良く生きること、と言ってもよいかもしれない。

ソローは、「今」を大切に生きることを強調しているのだが、それは、深く生きるためには不可欠だからであろう。

ソローは、「今という時間の刻み」⁽³⁰⁾を大切に生きてきた。水浴びをする時も、畑を耕す時も、鳥や植物を観察する時も、散歩する時も、友人と会った時も……。ソローは、暮らしのすべてにおいて「今」という瞬間・瞬間を生きたのだ。だからこそ、ソローは、森の中で、自然やものごとをよく感じつつ生きる深い生き方ができたのだろう。

ソローはまた、自分の人生を自分の力で創っていくことの大切さについても述べている。

「誰もが自分の力で大きくなればいいのです。他人はともかく、まずは自分に最善を尽くし、あるがままの自分を生きようではありませんか」と、ソローは私たちに呼びかけるのである⁽³¹⁾。また、ソローは、次のように述べて、自分のペースで生きることの大切さも強調している。

あなたの歩調が仲間の歩調と合わないなら、それはあなたが、他の人とは違う心のドラムのリズムを聞いているからです。私たちはそれぞれに、内なる音楽に耳を傾け、それがどんな音楽であろうと、どれほどかすかであろうと、そのリズムと共に進みましょう⁽³²⁾。

ソローは、他人と比較することも、急いで生きることも、また、他人と同じペースで生きることも意味がないと考えている。一人ひとりが自分の「内なる音楽」に耳を傾けて、心地よいリズムで生きていくこと、つまり、誰もが自分を大切に生きていくことをソローは提案しているのだ。ソローは、「生きるとは、私だけの実験」⁽³³⁾と考えるのであった。

自分だけの人生を生きることに見義を見出すソローにとっては、ソローの生き方は必ずしも他の人々に対する手本ではない。ソローは、「私はどんな人でも、私の暮らし方で暮らして欲しいとは思いません。(中略) 私は誰もが最大限に自分を大切に、(中略) 自分^の生き方^を探^すよう願^っていま^す」⁽³⁴⁾と述べるのである。

ソローが私たちに伝えたかったのは、ソローが森の暮らし(「生きるための実験」)の中で、生き方を考え、自分の生命の哲学を生み出したように、私たち一人ひとりが、自分の人生を生きるという「私だけの実験」を行い、その中で各自の生命の哲学を創っていくことの大切さなのであろう。

おわりに

本稿では、『ウォールデン』をもとに、ソローとの対話を試みた。

ソローが森で体験した暮らしは、効率や便利さを重視する大量生産・大量消費型の現代社会に生きる私たちに、多くのことを教えてくれる。

たとえば、簡素に暮らすことで、自由に生きれることや、自然やものごとをよく感じながら生きれることを、ソローは示してくれた。

簡素な暮らしは、私たちの身体に、ものごとを吸収できる容量を増やしてくれるのだろう。感受性を高める深い生き方をするには、ソローのような簡素な暮らしを私たちが選びとっていくことが大事になるのではなかろうか。

また、ソローの暮らしは、今を生きることの大事さも認識させてくれた。ソローは、常に「今」を生き、森の暮らしを楽しんだ。自然を心ゆくまで眺めて幸福感に浸ったのだった。他方で、私たちの暮らしは忙しい。膨大な情報を瞬時に処理して暮らしている。「今」に向き合い、「今」を感じながら生きるのは困難である。こうした生き方は、ソローの暮らしとは対極にあるように感じられる。ソローが、自給自足的な簡素な暮らしによって自由な時間を生み出し、余暇を存分に楽しんだように、私たちも「簡素」という価値に基づくライフスタイルを積極的に創造し、自分を大切に生きていくことが重

要なのではなからうか。

さらに、自然と深く関わることで感受性が高まることも、ソローの暮らしから学べることがらであった。ソローは生活者として森に 2 年余り定住し、具体的な自然と関わった。ソローの感受性は、そうした中で育っていったのである。私たちにとっても、このような自然と深く関わる体験は大事であろう。感受性が鋭敏であることは、自分を豊かにしてくれるものだからである。

ソローの暮らしからは、この他にも学ぶべき点が多い。それらについては、あらためて述べてみたい。

なお、ソローについては、研究の豊富な蓄積があるにもかかわらず、今回は、それを生かすことができなかった。今後は、それらの研究からも学びつつ、ソローの思想についての理解を深めていきたい。

注

- (1) ヘンリー・D・ソロー著、今泉吉晴訳『ウォールデン 森の生活』小学館、2004 年、p.108
- (2) 同上、p.108、p.406
- (3) ソローの生涯については、次の著書の第一章、第二章（pp.13-44）を参照・引用した。ヘンリー・S・ソルト著、G・ヘンドリック、W・ヘンドリック、F・エールシュレーガー編、山口晃訳『ヘンリー・ソローの暮らし』風行社、2001 年。
- (4) ソロー著、今泉訳、前掲書、pp.114-115
- (5) 同上、p.79
- (6) 同上、p.79
- (7) 同上、p.22
- (8) 同上、p.22
- (9) 同上、p.24

- (10) 同上、p.145
- (11) 同上、p.259
- (12) 同上、p.167
- (13) 同上、p.309
- (14) ソローは、家具の品目と個数を次のように挙げている。ベッド (1)、テーブル (1)、机 (1)、椅子 (3)、三インチの手鏡 (1)、暖炉の火箸と薪を載せる台 (1)、やかん (1)、鍋 (1)、フライパン (1)、ひしゃく (1)、食器洗い用ボウル (1)、ナイフとフォーク (2セット)、皿 (3)、カップ (1)、スプーン (1)、油差し (1)、糖蜜差し (1)、漆塗りのランプ (1) など。同上、p.84
- (15) 同上、p.64
- (16) 同上、p.308
- (17) 同上、p.326
- (18) 同上、p.61
- (19) 同上、p.63
- (20) 同上、p.71
- (21) 同上、p.207
- (22) 同上、p.72
- (23) 同上、p.214
- (24) 同上、p.216
- (25) 同上、p.72
- (26) 同上、p.76
- (27) 同上、p.166
- (28) 同上、pp.169-170
- (29) 同上、p.115
- (30) 同上、p.27
- (31) 同上、p.415
- (32) 同上、p.415

(33) 同上、p.18

(34) 同上、pp.90-91